



「共生」意識をもった教員を育てる国際理解教育 ～「異文化理解教育」と「海外教育研修」～

教育学部 手嶋 将博



東京都出身。千葉大学教育学部卒。教科書会社勤務の後、千葉大学大学院（修士）・筑波大学大学院（博士）を経て、2003年より文教大学に赴任。現在、教育学部教授、国際交流センター次長。専門研究分野は、比較・国際教育学（マレーシアの教育制度・政策）、教育制度学（諸外国と日本の教育制度の国際比較）、国際理解教育。本学では比較・国際教育学、国際理解教育関連の諸科目を、教育学部・大学院教育学研究科において計7科目担当。（てしま まさひろ）

国際化の進む現在、これからの教員には、異文化や自文化に対する正しい理解に立脚し、コミュニケーションを通して、多様性を認めあいつつ、共通の課題に向けて互いに協力できる「共生」の意識をもつことが一層求められる。本稿では、そうした意識の涵養をめざす国際理解教育関連の諸科目から、「異文化理解教育」と「海外教育研修」を紹介する。

1. 国際理解教育の目的と構造

人間は、自分とは異質のものと出会うことで、普段は意識しない自分自身をよりよく知ることができる。例えば、海外へ行った際に、食べ物やサービスなどの面で普段は意識しない日本の良さを実感することもあるし、あるいは、外国語を学ぶことで、却って日本語や日本文化について、理解が深まることもある。このように、「異文化」を学ぶということは、実は「自文化（日本文化）」を再認識・再評価すること、言い換えれば、「自分たち自身を学ぶ」ことであるともいえ、これが国際理解教育を学ぶ意義に繋がっている。

国際理解教育というと、海外の人や学校と交流をしたり、外国の社会や文化について学習したりする「異文化理解」的な学習や、英語等の外国語を学習するなどのイメージが先行する。しかし、実際に国際交流を行う際には、自分たちが日本の社会や文化についてよ

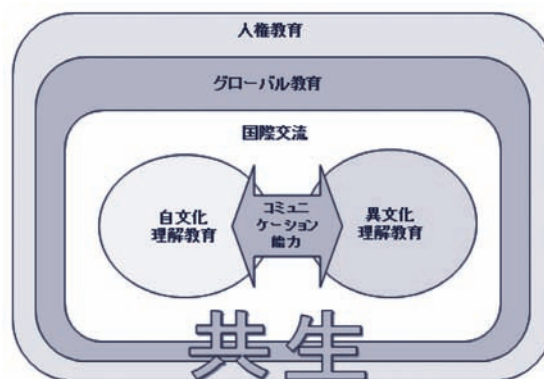


図1 国際理解教育の構造

く理解し、それらを説明したり紹介したりできなければ、双方向の交流が成立しないため、「自文化理解」の学習も必要になる。すなわち、「異文化理解教育」と「自文化理解教育」は表裏一体であり、両方の要素が必要なのである。そして、これらの相互理解の媒介となるのが「コミュニケーション能力」であり、これらの「異文化理解教育」「自文化理解教

育」「コミュニケーション能力」という3つの要素を活用して、より深い国際交流を行うことが可能となる。そして、これらの要素をさらに広げた学習が、「グローバル教育」や「人権教育」へと繋がっていく。こうして、自分とは異なる立場にある人々と、共通の問題意識や課題をもち、最終的には「共生」の意識をもって協力していけるようになることが、国際理解教育の目的である。

2. 「海外教育研修（アメリカ学校教育研修）」と「異文化理解教育」の連動

教育学部共通科目「海外教育研修」は、「アメリカ学校教育研修（略称・アメ研）」とも呼ばれ、米国メリーランド州チャールズ郡教育委員会（CCBOE）と文教大学教育学部が連携し、1990年から開始された、教育学部の研修プログラム授業（1単位）である。アメ研では、「国際理解教育」で示した3要素をふまえ、①アメリカの学校教育制度や政策などに関する理解を、実地での見学・体験学習を通して深めること（異文化理解教育）、②現地校における授業の事前準備や実践を通して、日本の教育事情や言語・文化・習慣などに対する知見も同時に深めること（自文化理解教育）、③ホームステイや国際交流の機会を通じて、アメリカの文化・生活を体験し、国際的なコミュニケーション力を高めること（コミュニケーション能力の育成）に目標を置いている。

アメ研は、毎年2月中旬からの2週間、参加学生約30名と引率教員2名によって実施され、筆者は主に研修のバックアップや現地との連絡調整等のコーディネーターを行っている。前半1週間は、CCBOEによる研修を中心に、アメリカの教育制度やカリキュラム、教育方法等を日本の制度や方法と比較しつつ学ぶとともに、幼・小・中・高・大の各学校を見学・体験する。後半1週間は、学生がホームステイ体験をしつつ、小・中学校で児童生徒に英語を用いて日本の文化や習慣などに関する授業を行う教育実習や、CCBOEやホストファミリーに感謝を伝える「さよならパーティー」を中心に展開される。

海外教育研修をより効果あるものにするためには十分な準備が必要である。特にアメ研

では、学生が日本文化に関する授業を行うため、米国の教育制度や歴史の学習に加え、日本文化に関する学習とそれを基にした授業づくり、英語で授業を行うための翻訳や模擬授業等を事前準備として行っておく必要がある。その役割を担う授業が、2015年度から秋学期に設定されている、教育学部共通科目の「異文化理解教育」（2単位）である。ここでは、学生が現地の学校で行う授業のテーマとして取り上げた日本文化について、単にそれらの概要や歴史等を調べて発表するだけではなく、どのような部分に日本文化としての特徴や独自性が表れているのかをより深く学生に探究させながら授業づくりを行っている。



図2 海外教育研修（アメ研）の授業風景（習字）

こうして、「海外教育研修（アメ研）」に参加する学生たちは、事前研修としての「異文化理解教育」をはじめ、現地での研修や教育実習、帰国後の体験レポートや指導案の提出といった諸課題を、助け合いながら進めていくことを通じて結束力を高めるとともに、実習校の先生方やホストファミリーの間にも絆を育てており、卒業後も継続してコンタクトを取り続けている者も多い。また近年では、研修後に海外留学や海外のボランティアに関心を持って実際に参加したり、教員に就職した後も、海外派遣を希望して日本人学校や現地校で働いたりする者も増えつつある。このように、「異文化理解教育」「海外教育研修（アメ研）」は、学生たちの国際感覚に刺激を与え、これからの教員に必要とされるグローバル化に対応する力や「共生」の意識を育成しているのである。